

小林 秀雄

評論家・こばやし ひでお Hideo Kobayashi
1902~1983

【明治35年~昭和58年】

来草年
昭和12年/1937



「小説よりも魅力に富む」
と言われた文芸批評を創始。

東京都生まれ。旧制一高時代に、仏詩人ランボオにふれ、文学への関心を深める。東大仏文科同期の三好達治、今日出海、また旧友の富永太郎らと文学交遊。特に大正14(1925)年、中原中也と中原の恋人であった長谷川泰子(後に秀雄と同棲)との出会い、そして破局は、彼の文学観に大きな成熟をもたらす。昭和4(1929)年頃から本格的な文芸評を開始。当時、文壇を席卷していたプロレタリア文学の「概念による欺瞞」を衝き、批評家の地位を確立。評論というジャンルを創造の域に高めた。大戦下で執筆した『無常といふ事』『呻吟』などのエッセーでは、日本古典論の範型を提示。戦後、精神のドラマを描いた『モオツアルト』『ゴッホの手紙』ほか、大作『本居宣長』を発表。国民的知性として尊敬を集めた。昭和42(1967)年、文化勲章受章。

小林秀雄の来草は、昭和12(1937)年2月、林芙美子、瀧川久弥ら文壇の仲間とともに前をとり、真冬のスキーを楽しんだことが、芙美子の記録に残されています。

賀川 豊彦

社会運動家(キリスト教信者)・かがわ とよひこ Toyohiko Kagawa
1888~1960

【明治21年~昭和35年】

来草年
昭和2年/1927



キリストの教えから、社会運動を指揮。
自伝的小説に『死線を越えて』。

明治末から昭和にかけて活躍した社会運動家。過重な家庭環境と病身の苦難の中で、キリスト教への信仰を強める。神戸神学校在学中から、神戸のスラム街に住み、伝導と救済活動に努めた。大正9(1920)年、活動を綴った小説『死線を越えて』を発表、ベストセラーに。米プリンストン大学に留学の際、労働運動にふれ、帰国後友愛会に参加。労働争議を指導し、労働者に強い影響力を持った。大正11(1922)年、杉山元治郎とともに日本農民組合を結成。大正15(1926)年の労働農民党の結成で中央委員に。同年、『神の国運動』を開始し、活動の中心は宗教へ。第二次大戦後は、伝導活動を継続する一方、日本社会党結成への関与、また世界連邦運動を推進するほか、生涯を社会運動の中に過ごした。

豊彦は来草の前、湯ノ沢の三上千代女史宅に3ヵ月ほど滞在しました。千代女史は、草津にらいた病患者の部落があるにもかかわらず、医師も看護婦もいない事実を知り、コンウォール・リー女史の事業を手伝った看護婦。国立衛生事業団を視察した豊彦は、後に日本救済協議会理事となり、らい病対策に努めました。

ブルーノ・タウト

[明治13年～昭和13年]

建築家・Bruno Taut

1880～1938

来草年

昭和9年/1934



共和国時代のドイツが生んだ世界的建築家。 日本建築を海外に紹介。

ドイツ人建築家。ナチス政権台頭を恐れ、昭和8（1933）年、訪日。昭和11（1936）年までの滞日中、桂離宮ほか日本古来の建築物を造訪。日本建築の魅力を海外に広く伝える。建築学校を卒業後、ベルリンに建築事務所を開設。大正3（1914）年、ケルンの独工作連盟博に提出した『ガラス・ハウス』を設計、脚光を浴びる。表現主義建築運動を代表する建築家として活躍。第1次大戦後、ガラス建築の幻想的なイメージに満ちた『アルプス建築』など一連の本で国際的にも有名に。1920年代後半から行われたベルリン郊外の集合住宅の設計が代表的な仕事。各国の大学で教鞭をふるったが、昭和13（1938）年、病死。建築物だけでなく、日本の美術にも強く惹かれ、その見聞を『日本美の再発見』などに著す。

タウトは、滞日中、工芸美術を指導していた高崎市の、井上房一郎氏の案内で、草津へ訪れました。旅館が地ふ温泉街を見たタウトの興味は、建物に注がれます。百年前に建てられた建物を建築家の視点で観察し「全体の形を適宜に分解取捨する仕方は、実に簡単でしかも要を得た解決方法である」と分析しています。

岸田 国士

[明治23年～昭和29年]

劇作家・きしだ くにお Kunio Kishida

1890～1954

来草年

昭和20年/1945



文芸座を旗揚げ。 フランス現代劇を研究し、わが国に新劇の風を。

東京都出身の劇作家。陸軍幼年学校、士官学校を経て軍務に就くが、文学に熱中するあまり休職願を提出し、大正5（1916）年東大仏文科に入学。大正8（1919）年に渡仏して演劇の勉強を積む。父の死を機に帰国。大正13（1924）年、処女戯曲『古い玩具』『チロルの秋』を発表する。フランス風の繊細さ、陰影に富む会話に努め、戯曲の文学性を重視。新しい演劇活動の支柱となり、新劇主流の左翼演劇に対抗した。戯曲は60編を超え、秀作が多い。昭和12（1937）年、文学座創立に参加。新聞小説の『暖流』をはじめ、小説家としても健筆をふるった。

昭和17（1942）年、大政翼賛会の文化部長を辞し、北軽井沢の別荘に移った国士は、その地で終戦を迎えます。以前から草津への憧れは強く、「草津へ行ってみたい。仕事も考えている」と知人に話していました。そして昭和20（1945）年に東京し、ようやく夢が実現しました。

斎藤 茂吉

歌人・さいとう もきち Mokichi Saito
1882~1953

来草年
昭和8年/1933



万葉に学び、歌に生命を映す。
大正・昭和期を代表する歌人。

山形県に生まれ、高等小学校卒業後に上京。親戚の開業医宅に身を寄せ、開成中学へ。在学中の明治38（1905）年、正岡子規『竹の里歌』に感動して作歌に熱中する。翌年、伊藤左千夫に師事。東京帝大医科を卒業後、巣鴨病院に勤務。短歌を『生のあらはれ』とした茂吉独自の生命主義は、大正2（1913）年の処女歌集『赤光』に満ちている。その後ウィーン、ミュンヘンへ留学。帰国後、島木赤彦死去にともない『アララギ』の編集責任者に。以降、歌集『ともして』『寒雲』など佳編を発表し、大著『柿本人麻呂』で学士院賞受賞。昭和26（1951）年、文化勲章受章。

茂吉は来草の折り、以前から続く腰痛を伴いながらも、温泉に浸かったり、散歩に興じたりしました。西の河原、中ほどに建てられた碑には「いづこにも雨が晴きいでて流れある 谷間を行けば身はあたたかし」という歌が刻まれています。歌集『白機』に、滞在の時に詠んだ短歌を収録。『草津小吟』と題し、草津、そしてベルツへの思いを詠っています。

与謝野 鉄幹(寛)

歌人・よさの てっかん(ひろし) Tekkan(Hiroshi) Yosano
1873~1935

来草年
昭和9年/1934



『明星』を主宰。
浪漫主義的立場から、短歌の革新を目指す。

明治大正時代の歌人で『明星』主催者。明治25（1892）年に上京し、落合直文に師事。翌年『浅香社』結成に参加する。明治27（1894）年には、二六新報に『亡国の音』を連載し、旧派の短歌を批判して注目を浴びる。明治32（1899）年『新詩社』を創立、翌年には『明星』創刊。明治34（1901）年、晶子と結婚。後進指導に精を出す一方で詩歌集や歌論集を出版する。雄弁で男性的な歌を詠む鉄幹は、短歌の革新を目指し、浪漫主義的運動展開の中心人物となった。明治44（1911）年には渡欧してパリに滞在。帰国後、大正8（1919）年から昭和7（1932）年まで慶大教授となり、国文学や国文学史を講じた。

鉄幹は、晶子夫人とともに来草。町内の旅館に滞在しました。二人の宿泊を知り、会見を申し込んだ人の記憶によれば、鉄幹は、世間のすべてをなめつくされていたのか、まろやかな笑顔でむかえ、すぐに筆をとって妻とともに短歌に歌を書いていたそうです。また、鉄幹は『浅園より白根にわたる高原の草津秋なり露に陽のぼる』という歌を残しています。

与謝野 晶子

歌人・よさの あきこ Akiko Yosano
1878～1942

[明治11年～昭和17年]

来草年
昭和9年/1934



代表作は『みだれ髪』。
女性という、美しい性を謳いあげた歌人。

明治大正昭和の歌人、評論家。明治33（1900）年から与謝野鉄幹が創立した新詩社の社友となり『明星』に短歌を掲載。明治34（1901）年、鉄幹と結婚する。同年に、歌集『みだれ髪』を刊行。激しい恋心と若い女の官能という内容に世間は一驚した。その後も歌集『小扇』や、ライバル・山川登美子らとの合著『恋衣』などで耽美的想像力を発揮。明治末期から大正には、平塚らいてうや山川菊栄らと母性保護について論争。婦人解放論、政治、教育、社会といった幅広い分野に関する評論でも、晶子は、鋭い洞察、豊かな見識の持ち主であることを証明した。

晶子の歌集『山のしづく』には、鉄幹を訪れた時の草津の思い出の歌が数多く収録されています。当時、晶子の短歌は夫・鉄幹を凌ぐほど秀逸と言われ、同歌集でも『潔白く立ちて藍黄の種ならぶ演場の前の山の湯の前』など、草津の温泉情緒、自然の風景を美しい言葉で描いています。

土屋 文明

歌人・つちや ぶんめい Bunmei Tsuchiya
1890～1990

[明治23年～平成2年]

来草年
昭和20年/1945



上州生まれの歌人。
茂吉らと『アララギ』全盛期を築く。

歌人。群馬県群馬郡の農家に生まれる。明治42（1909）年に上京して伊藤左千夫宅に寄寓し、第3次『新思想』に参加。短歌雑誌『アララギ』初期刊人の最年少であったが、島本赤彦、斎藤茂吉、中村憲吉らの影響を受けつつ、大正6（1917）年には同誌の選者の1人に。翌年から教師に専念するが、大正13（1924）年に帰京。歌人として再出発を切る。大正14（1925）年に第1歌集『ふゆくさ』刊。島本赤彦亡き後は斎藤茂吉とともに『アララギ』の指導的な存在に。戦後は同誌に文明選歌欄を設け、新人を育成した。また、万葉集研究にも挑み、昭和52（1977）年、『万葉集私注』10巻を刊行した。歌集に『山下水』『青南集』『続青南集』ほか。

昭和20（1945）年5月、東京で戦災にあった文明は、弟子のあっせんにより、吾妻町に疎開。6年に及ぶ滞在の間、ことあるごとに草津を訪れたと伝えられています。戦後、歌人の佐藤緑葉らとともに、吾妻一帯の文化復興に貢献した文明ですが、草津への愛着はことのほか深く、代表歌集『山下水』の冒頭には、草津を詠んだ歌が五首掲載されています。

吉野 秀雄

[明治35年～昭和42年]

歌人・よしの ひでお Hideo Yoshino
1902～1967来草年
昭和23年/1948

人生を物語る作風が共感を呼んだ、 高崎出身の歌人。

群馬県高崎市出身の歌人。大正11（1922）年に慶応大経済学部に入學するが、肺結核を患い中退。闘病中に正岡子規の作品に啓発されて国文学を独修する。家業の織物問屋・吉野藤東京支店で働きながら、仏教美術研究の権威者で歌人・書家の会津八一に師事。昭和22（1947）年刊行した第3歌集『寒蟬集』は4児を残して他界した妻への挽歌、家庭的な不幸を詠んだ人生詠で、生動感きわだつ作風で注目。代表歌の「真命の極みに堪へてしむらを歌えてゆだねしわがも子あはれ」は死期が近い妻との交流を詠んでいる。昭和33（1958）年、『吉野秀雄歌集』で読売文学賞受賞。随筆集に『やはらかな心』『心のふるさと』など。

昭和23（1948）年、秀雄は、高崎市の俳人・上村古魚とともに来草。宿泊した旅館には、秀雄の書がいくつか残されています。彼の草津への愛着は深く、『吉野秀雄歌集』には「草津秋情」という一編を収録。また、酔った勢いで湯畑に向かって座り、手をついて「温泉に感謝する」と叫んだというエピソードも伝えられています。

鹿児島 寿蔵

[明治31年～昭和57年]

人形作家・歌人・かごしま じゅそう Juzou Kagoshima
1898～1982来草年
昭和29年/1954

人形の創作を、 芸術の域までに高めた人間国宝。

独自の紙粘土による紙型人形の創作を続け、人間国宝に。アララギ派歌人でもある。福岡市生まれ。有岡米次郎に弟子入りし、独自のテラコッタ（陶芸）人形の制作を始める。その一方で短歌雑誌『ハカタ』の同人となる。第1回帝展に紙型人形『黄葉』が入選。以後、さまざまな展覧会に出展。神話・伝承などにも関心を寄せ、創作のため幅広く取材。代表作には『独楽』『延寿比奈』など。歌人としては、島木赤彦、斎藤茂吉、土屋文明らに師事。潮夕会を結成し、主宰。機関誌『潮夕』も発刊した。歌集『故郷の灯』で逍遙賞を受賞。また、4年連続で宮中歌会始の選者にもなった。

昭和29（1954）年、寿蔵は『潮夕』の同人たちと白根登山をし、万葉方面へ下りて、一泊しています。この時、雄大な山岳の自然に心打たれた寿蔵は16首の歌を詠み、「草津白根作品集」と題して、『潮夕』に掲載。喝さいずる 煙りの高く まじりゆく 天は霞々と日の照りさかるなどの秀歌が残されています。

村松 梢風

[明治22年～昭和36年]

むらまつ しょうふう Shoufu Muramatsu

1889～1961

来草年

昭和8年/1933



克明な人物伝に定評あり。

『残菊物語』は、広く知られた名作。

静岡県生まれ。慶大卒業後、日本電報通信社で記者を務めるかたわら、文筆を志し、大正6（1917）年、雑誌『中央公論』に『琴姫物語』を発表。その情話的な語り口を、名づける編集者・滝田桐陰に認められ文壇デビュー。騒人社を設立し、個人誌『騒人』を創刊。『正伝清水次郎長』『人間飢餓』『東海美女伝』などを連載し、緻密な時代考証を基にした伝記風小説を数多く残した。その方面の代表作に『本朝画人伝』『近世名勝負物語』など。また、昭和12（1937）年に発表した『残菊物語』は、梢風の代名詞とも言える作品。演劇・映画化され、そのストーリーは多くの人の心を打った。中国の歴史・文化にも造詣が深く、紀行文に『魔都』『支那漫談』など。

梢風は、昭和8（1933）年、江戸時代の草津を舞台にした短編小説『草津漫筆』を文芸誌『大衆俱樂部』に発表しています。湯治の名所だが、江戸に残した武家の妻の浮気を晒けることからはじまり、ユーモアあふれる物語が展開されています。また、梢風がこの年に草津を訪れていることから、来草の目的は取材だと思われます。

菊池 寛

[明治21年～昭和23年]

小銃家・きくち かん Kan Kikuchi

1888～1948

来草年

昭和8年/1933



芥川、直木両賞創設ほか、

功績大の文壇の重鎮。代表作に『父帰る』。

香川県高松市生まれの小説家。奔放な生活が原因で東京高師を除名される。その後、一高でも友人の罪を被り退学。大正2（1913）年、京大へ進学し、劇作家を志す。しかし、一高の同級生だった芥川龍之介や久米正雄らに誘われて、第3次・第4次『新思潮』に参加。後に代表作となる小説『父帰る』を発表したが世間に認知されなかった。京大卒業後、『時事新報』の記者に就き、『中央公論』に短編小説を発表。新進作家と認められ、新聞小説を連載。流行作家となる。また、大正12（1923）年に『文芸春秋』を創刊。芥川賞、直木賞、菊池寛賞を創設した。数多くの役職に名を連ね、"文壇の大御所"と呼ばれた。

寛が初めて草津を訪れたのは、昭和8（1933）年のスキーカーニバルの時。多彩な著名人を招待したこのイベントは成功を収め、草津のスキー場は全国に名を広めました。その後も、彼は何度か足を運んだ様子で、その思い出はエッセー『話し村』の中に収録。旅情を込めた筆致で描かれています。

石川 達三

[昭和38年～昭和60年]

小説家・いしかわ たつそう Tatsuzou Ishikawa
1905～1985

来草年
昭和10年/1935



小説を通じて、諸問題を追求した、
社会派の作家。

秋田県出身の小説家。昭和2（1927）年に早大英文科を中退後、昭和5（1930）年、移民船でブラジルへ渡り1年滞留する。その体験をもとにした『蒼氓』は昭和10（1935）年、第1回の芥川賞を受賞。その後、ダム湖底に沈む奥多摩の村を題材にした『日蔭の村』や、日中戦争を視察した『生きてゐた兵隊』を執筆。戦後の作品では、戦時下の言論人の苦境を描いた『風にそよぐ草』、教育問題を主題とした『人間の壁』など、時事問題や社会的風潮をテーマにした作品を発表。アジア・アフリカ作家会議のメンバー、日本ペンクラブ役員も歴任。著作は『金環蝕』『偏だらけの山河』など多数。

達三は、記念すべき第1回の芥川賞を受賞していますが、その受賞の報を受けたのは、草津に滞在していたときでした。受賞作『蒼氓』は、海外移民政策の問題点を説いた作品として、昭和文学史に刻まれています。

林 芙美子

[昭和36年～昭和28年]

小説家・はやし ふみこ Humiko Hayashi
1903～1951

来草年
昭和12年/1937



重圧を明るくはねかえした女流作家。
代表作に『放浪記』『浮雲』。

小説家。幼い頃から家族と九州各地を行脚。転校を繰り返す中で文学志望が芽生える。大正11（1922）年、尾道高女卒後に上京。工員、女給など職を転々としながら詩や童話を創作。詩人の田辺若男と同棲中、萩原恭次郎ら前衛詩人と知り合い強い影響を受けた。昭和3（1928）年、『女人芸術』連載の『秋が来たんだー放浪記一』が好評で、昭和5（1930）年、『放浪記』として出版。恵まれなかった半生を捨てばちな明るさで描き、ベストセラーに。日中戦争勃発後は従軍作家として各地を巡回した。代表長編『浮雲』をはじめ、『晩菊』『めし』など、抒情と哀愁をたたえた多くの作品を発表。

芙美子は、昭和12（1937）年に草津スキー場を訪れています。そのときは文芸評論家の小林秀雄や河川久寿も一緒でした。中央公論社の『日本の文学・四十七・林芙美子』（昭和39年刊）の年譜には、『昭和12年（34歳）2月 小林秀雄、河川久寿と草津ヘスキーに行く』とありました。

井上 靖

[明治40年～平成3年]

小説家・いのうえ やすし Yasushi Inoue
1907～1991

来草年

昭和25年/1950

『天平の甞』『敦煌』などの作品で、
歴史小説に新境地。

純文学・中間小説・新聞小説と、練達した筆を揮った小説家。北海道出身。京大在学中に『流転』で千葉龍雄賞に入賞。卒業後、毎日新聞社に入社。昭和24（1949）年に『闘牛』が芥川賞を受け、文壇の人気作家として旺盛な著作活動に入る。昭和32（1957）年以降は数多く中国を訪問。中央アジア・オリエント・ヨーロッパを旅して『敦煌』『樓蘭』などの歴史小説を次々に発表する。日本史分野の『風林火山』『淀どの日記』（野間文芸賞受賞）や『本覺坊遺文』（日本文学大賞）は、80歳を越えて完成した『孔子』とともに井上文学の最高峰をなす。日本芸術学会会員、文化勲章受章。

井上靖は、『闘牛』で芥川賞を受賞した翌年、草津を訪れています。作家として、資料収集のため關管紙業群馬紙業所（元山）、草津事務所などを視察していたようです。

深田 久弥

[明治36年～昭和48年]

作家・ふかた きゅうや Kyuya Fukata
1903～1971

来草年

昭和12年/1937

風土色ゆたかな作風を確立。
登山家としても著名。

山岳随筆家、作家。東大文学部中退。昭和2（1927）年から3年間、改造社編集部勤務。昭和4（1929）年以後、『群狼の野づら』、『オロココの娘』などを発表。素朴さと野性味のある作風が評判に。また、小林秀雄らの『文学界』同人としても活躍する。昭和10年代には『鎌倉夫人』、『知と愛』を刊行する傍ら、山岳紀行文集も出版。昭和19（1944）年には大戦に召集されたが、帰還後、主として山岳記事を執筆する。内外の文献を収集して、ヒマラヤ研究に没頭。その代表的な成果は、読売文学賞を受賞した『日本百名山』をはじめ、『ヒマラヤの高峰』全5巻、『中央アジア探検史』などの著作に見受けられる。

幼い頃から山登りやスキーが好きだった久弥は、読売文学賞を受賞した作品『日本百名山』の中で、名山の1つに草津白根山を上げており、白根山の特徴を見事な文章で描き出しています。また、晩年の作『瀟湘なる自然 ―わが山脈の記―』でも草津の自然にふれ、久弥の草津に対する心酔の様子がうかがえます。

高村 光太郎

彫刻家・たかむら こうたろう Koutaro Takamura
1883~1956

[明治16年~昭和31年]

来草年
昭和2年/1927



完成された作品とともに、
妻・智恵子との愛で、人々の記憶に。

大正~昭和の彫刻家・詩人。東京下谷生まれ。父・高村光雲は木彫家。東京美術学校（現・東京芸術大学）教授、帝室技芸員。光太郎は、東京美術学校在学中から『明星』に短歌や詩を寄稿。明治35（1902）年、彫刻科を卒業すると、渡欧してロダンに学ぶ。活動分野は、彫刻・詩・批評・翻訳などと実に幅広く多岐に及んでいる。交流も活発で、美術では岸田劉生ら、文芸では北原白秋・吉井勇ら耽美派芸術家。代表作は、彫刻では『手』『老人の首』、詩集では口語自由詩を完成させた『道程』。また、妻・智恵子への切実な愛をつづった『智恵子抄』など。

光太郎は、2度草津を訪れています。初めて来草した昭和2（1927）年には、この冊子の冒頭で紹介した詩『草津』を残し、白根神社付近近くの御山公園には詩碑が建てられています。2度目に、智恵子夫人を伴って訪れた昭和8（1933）年には、滞在の折「草津の湯がよく、智恵子のからだにききそうです」という手紙を書いています。また、名詩集『道程』には、草津を詠んだ詩も収録されています。

相馬 御風

詩人・そうま きよふう Gyohuu Souma
1883~1950

[明治16年~昭和25年]

来草年
昭和3年/1928



「都の西北」を拠点に、
三木露風らと口語詩作を推進。

詩人・歌人・評論家。「都の西北」で始まる、早稲田大学校歌作者として有名。新潟県生まれ。一元描写を定着させた岩野泡鳴らと、早大在学中に『東京純文社』を結成。雑誌『白百合』を創刊し、処女歌集『睡蓮』を発表。『早稲田文学』の編集社員も務める。後、三木露風、人見東明らと早稲田詩社を結成し、口語詩推進の中心となる。『瘦犬』などの口語詩、『御風詩集』を発表する一方、自然主義文学の論陣を張り『黎明期の文学』を刊行した。母校では講師として教鞭を振るった。主な作品に『還元録』『大愚良寛』『相馬御風著作集』など。

『朝の掛けわり 春への道もや ヨイトサノサ』草津方面の町 サアサヨイトサノ 夢の町」と歌われる「草津小唄」の作者としても知られているのが相馬御風です。草津小学校の沿革誌には「昭和3年9月26日、野口南嶺、中山晋平両文人、当時日誌研究トシテ来町ス」と、小唄の作者・中山晋平とともに来草した記録が残されています。

西条 八十

[明治25年～昭和45年]

詩人・さいじょう やそ Yaso Saijyo

1892～1970

来草年
昭和5年/1930



詩人。フランス近代詩を広く紹介。
作詞でも活躍。

詩人。「かなりや」に代表される童謡、流行歌「東京音頭」などの作詞家としても知られる。東京生まれ。早稲田大学在学中から創作に励み、日夏秋之介、三木露風らと交友。処女詩集『紗金』は高く評価される。また、仏ソルボンヌ大学に留学し、後、母校の教授に。マラルメ、ランボーの紹介に尽くした。さらに、童謡童話雑誌『赤い鳥』に発表した童謡「かなりや」が、新鮮でモダンな言葉づからいて反響を呼び、曲としてもヒット。これを機に大衆歌謡の作詞家として名をなす。戦時中は、多くの軍歌を作詞。戦後は、作詞界の大御所として著作権協会会長を務めた。民謡作家としての功績も大きい。ほか著作に「美しき喪失」など。

西条八十の来草は、昭和5（1930）年、前年に『東京音頭』（中山晋平作曲）をヒットさせ、歌謡に作詞家としての実績を重ねていた頃のことです。草津で暮らした際には、八十直筆の書が残されています。

吉田 一穂

[明治31年～昭和48年]

詩人・よしだ いっすい Issui Yoshida

1898～1973

来草年
昭和39年/1964



実験的詩作に情熱を傾けた、
近代象徴派最高の詩人。

北海道生まれ。本名は由雄。少年時代から文学者を志し、早大英文科に入学するが、生家の没落で中退。若山牧水、金子光晴などの友人、北原白秋、島本赤彦などの先輩と親交を結ぶ。一穂の作品の特徴は、「美しい詩を短い詩片で」創作すること。また俳句の「弁証法的構造に厳密な比率の構造」を見いだし三行詩を創作するなど、実験的な詩人としても知られていた。同時代を生きた詩人に比べて、一般の人にはあまり知られていないが、没後、一穂を称賛する詩人や文化人は多く、彼を師と仰いだ地質学者の権威・井尻正二博士は「詩人 吉田一穂の世界」の中で、一穂を「天才詩人」と評している。

吉田一穂の名は、草津放生河原に建てられた「山崎町」「吉田一穂詩碑」で存じの方も多いでしょう。「山崎町」の詩は、日本武尊と弟橘姫の悲しい伝説に心をひかれて創作したものです。白根火山ロープウェイ山麓駅前に建つ、碑の文字の原型は、建業で有名な一穂白らが執筆したものです。一穂は「山崎町の碑」の除幕式にも参加し、自作の詩を朗読しています。